

は し が き

今から30年ほど前に、欧米のヒンディー語研究と教育の実際の一端を現地で見る機会があった。その時、各国のヒンディー語の先生が、初対面の私にいつも決まって同じ質問をしたのがおかしかったのを覚えている。質問は二つで、「なぜヒンディー語を選んだのか」と「ヒンディー語を学んだ学生はどこに就職するのか」だった。

この30年、インドの人口が8億から12億に増えたことは、人口増加率の数学的正確さを裏付けただけであまり驚きはないが、日本とインドの関係は、量と質ともに、私の予想を大きく超えた変化をとげた。日本からの政府開発援助を受けた首都デリーと近郊を結ぶ総延長約200kmの地下鉄デリー・メトロは現在も拡張中で、5年後には総延長が約2倍になりロンドンの地下鉄を超えるらしい。さらに日本の新幹線がインドに輸出されようとする時代、インド・ビジネスマンの子弟用にインド人学校が東京などに開校される時代となり、旅行や仕事のためにヒンディー語を学ぶ日本人も増えてきた。私のところにも、インドで働く日本人用のヒンディー語検定問題作成の依頼が日本の会社から来るほどだ。かつて質問された「学生の就職」に関しては、当時と今では大分答え方が違ってくるはずだ。

もう一つの質問「なぜヒンディー語」の答えは、恥ずかしいことに未だによくわからない。当時は苦しまぎれに、「あなたと同じです」と答えた。どの先生も、苦笑して、それ以上このことは質問しなかったのも共通していた。ただ、高校卒業後に「なんとなく選んでしまった」ヒンディー語の教室で、初めて文字と発音に接した時の新鮮な驚きは今もよく覚えている。私は、東京外国語大学、インドのアラーハーバード大学で教育を受けることができた。両大学に関わる多くの先生方の学恩、また友人たちから受けた有形・無形の恩恵は忘れることができない。また、東京外国語大学に勤務してからは、最初の所属である外国語学部(現在、言語文化学部)、次に所属したアジア・アフリカ言語文化研究所の同僚の方たちからは、とうてい数え上げることのできないほどの知識や便宜を享受することができた。本来であれば、それぞれお名前をお出ししてここに謝意を表すべきではあるが、ここでは、一番最初にヒンディー語の手ほどきをしてくださり後の私の進路を決定づけた三人の恩師、土井久弥先生、田中敏雄先生、ラクシュミーダル・マーラヴィーヤ先生のお名前を出すだけで許していただきたい。

この辞典がこのような形で出版できたのは、アジア・アフリカ言語文化研究所、特に、情報資源利用研究センターと文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」の成果の一端である、電子出版技術の開発と南アジア諸言語のテキストコーパスの構築に負っている。また辞典出版企画には、最初から三省堂辞書出版部に加わっていただいた。ヒンディー語をはじめ、日本ではあまりなじみのない南アジア諸言語の辞典出版を引き受けるという決断をしていただいたことには、いくら感謝してもしきれない気持ちである。昨年度の「シンハラ語」「パンジャービー語」につづいて、今年「カンナダ語」とこの「ヒンディー語」が、無事、出版にこぎつけることができ、ここに4冊の南アジア諸言語の辞典が誕生した。

編集の最終段階で様々な点検の労を取っていただいた川路さつき氏、三省堂辞書出版部の皆さま、とりわけ企画の始まりから出版に至るまでの一部始終を温かく見守り、時には叱咤激励してくれた柳百合氏には心からの感謝を捧げたい。

2016年6月23日

町田和彦